

News Letter

公益財団法人 集団力学研究所 No. 60 2016.9.30

ホームページ <http://www.group-dynamics.org/>

中国のコミュニティ事情

集団力学研究所 所長 杉万俊夫

「中国には政治と経済はあるが、社会が無くなった」---- もう 20 年ほど前でしょうか、中国社会科学院の羅紅光教授から、このような不可解な言葉を聞きました。中国社会科学院は、社会科学の分野で中国最大の研究所です。単なる研究を超えて、各種の国策提言も行っています。集団力学研究所は、長らく中国社会科学院とも国際共同研究を行っています。

政治と経済と社会は一体のはずなのに、社会だけが無くなったとは？羅教授によくよく話を聞くと、「社会」とはコミュニティのことだとわかった。「共産党による強力な政治と、急速に市場化されつつある経済はあるが、コミュニティが雲散霧消してしまった」と彼は言った。

1978 年に始まる改革開放政策までの中国都市部では、同じ企業（当時は国営企業）に働く従業員は集住し、その居住区は「単位」と呼ばれていた。日本風に言えば、同一企業の従業員がすべて居住する社宅である。「単位」は、まさにコミュニティとしての機能を果たしていた。行政サービスや規制は、ほとんど「単位」を通じてなされていた。

しかし、改革開放後は、私企業が急増し、就職、居住の自由度が飛躍的に高まった。それに伴い、「単位」は崩壊。言い換えれば、地方政府と個々人をつないでいた中間集団が消滅したのである。まさに、「社会」なき状況である。

2000 年以降、中国政府は、新しい中間集団として「社区」建設に着手した。「社区」とは、1,500 から 3,000 世帯からなるユニットである。さらに、「社区」だけでは規模が大きすぎるため、さらに小さな「小区」に分けて管理しようとしている。「小区」は、同じマンションに住む世帯で構成されているため、「社区」に比べると、住民の利害も共通している。

「社区」や「小区」は、いわば上からのコミュニティづくりである。しかし、中間集団が消滅し、個々ばらばらに分解してしまった住民に対して、トップダウンのコミュニティだけではうまくいかない。少なくともある程度の住民間関係、住民ネットワークがなければ、行政のサービスや規制も末端まで行き届かない。

近年、中国では、住民間ネットワークをボトムアップで創造しようとする試みが始まっている。「同好会」が、それである。一見すると、「同好会」は、スポーツや文化活動など、単なる趣味の愛好者グループと変わらない。実際、「同好会」の活動は、日本にも数多くある趣味サークルと違いはない。

重要なのは、その切実さであろう。逆に言えば、そこまで住民の絆が消失してしまっているのだ。何とか、絆ゼロの状態から脱したい ---- その切実さがある。行政は、「同好会」の活動を支援している。将来的には、「同好会」から、社会貢献的な活動が生まれることが期待されている。

平成27年度地域塾活動一覧

- 10月度研究会 「杉万所長講演～新年度を迎えて～」(10/17) 参加者8名
*楊貴妃の里まちおこし他各メンバーからの報告もあり
- 11月度研究会 「ネットワーク的連携で地域が変わる」(11/28) 参加者6名
(講師) 地域情報化アドバイザー・畑井克彦氏
- 12月度研究会 「モンゴル砂漠化防止活動～この夏の報告」(12/19) 参加14名
(講師) 集団力学研究所主任研究員・増田達志氏
- 1月度研究会 「公民館からみた大浜地区の現状と課題」(1/30) 参加者8名
(講師) 大浜公民館長・大島弘枝氏
- 2月度研究会 「町内会が消える？」(2/27) 参加者7名
(報告) 服部正・地域塾頭
- 3月度研究会 「地域ボランティア活動をめぐって～ボランティアとビジネス～」
参加者15名(3/26 いとしま応援プラザにて)
- 4月 休会
- 5月度研究会 「3月糸島研究会について」(5/28) 参加者8名
*大里先生の報告の後ボランティアの在り方について意見交換
*「杉山三代研究会」「熊本地震」他参加者からの活動報告
- 6月度研究会 休会
- 7月シンポジウム 「楊貴妃の里のまちおこし」(7/10) 参加者17名
講師：田立知曉氏(真言宗御室派二尊院住職)
- 8月度研究会 休会
- 9月度研究会 「熊本地震を体験して」(9/26) 参加者6名
講師：八ッ塚一郎氏(熊本大学准教授)

(地域塾塾頭 服部正氏より)

熊本地震を体験して

集団力学研究所／熊本大学 八ッ塚一郎

1. 後に「前震」と呼ばれる揺れ

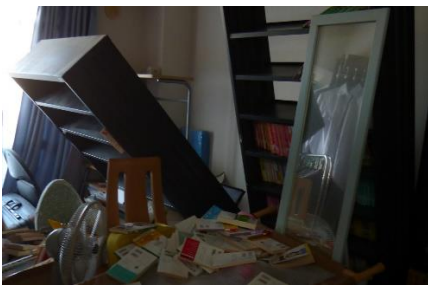
4/14（木）21:26 M6.5 益城町震度7 熊本市中央区震度5強

- ・小1の娘の入学式（4/12）直後
- ・揺れの最初は高をくくっていたが立ってられない、とっさに寝室に飛び込んで寝ていた子どもたちに覆い被さる
- ・寝室には倒れる物を一切置かないようにしていたが、吊り下げ照明が騒々しく飛び跳ね激突しいつ落ちるか恐怖、余震の隙を見て撤去
- ・夜半知人から心配の電話をもらうが余震の最中でかえって動揺する
- ・自宅は停電・断水なし。明け方までまんじりともせず過ごす
- ・翌15日、日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）視察で宿など手配
- ・研究室の本が多数落下したのをざっと片付け、NVNのメンバーと懇談して帰宅
- ・このときは、深刻だが限定的な被害、これで終わった、という印象が強かった

2. 後に「本震」と呼ばれる揺れ

4/16（土）01:25 M7.3 益城町・西原村震度7 熊本市中央区震度6強

- ・突き上げる激しい揺れのあと、3分以上、異様な横揺れが延々と続く。ケーキの箱の中で雑に運ばれているような感覚。停電で真っ暗な中、家財道具が次々と倒れる音、洗濯機のホースが外れて水が噴き出す音、しかし布団をかぶったまま身動きが取れない
- ・暗闇で余震のたびに緊急地震速報が盛大に鳴動する。揺れ始めた後、余震動の真っ最中に轟音が鳴り響き、とっさに止め方がわからず恐怖と混乱に拍車をかける
- ・停電は数時間で復旧する。断水するが翌日には試験送水再開、また実はマンションのタンクに水が残っていた
- ・夜が明けたら本棚が倒れ、冷蔵庫などの扉がすべて開き、壁面にヒビが入り、食器棚が数十センチ動いている。意外にも割れた食器は少ない。
- ・避難を検討し、また身内にも勧められるが自宅が安全と判断。子どもの小学校の体育館にも行って見たが、すでに満員で立錐の余地もなかった
- ・マンションのタワー式立体駐車場は外から見ても損壊しており、完全に廃車を覚悟していた。その後5/2に奇跡の回収。しかし駐車場の修理はいまだなされていない



直後の散乱の一部

3. 直後数日間

- ・個人的に役立ったもの
- ①無印良品「LED持ち運びできるあかり」普段使いの非常灯
- ②簡易トイレキット
- ③家具固定突っ張り棒
- ・誰が乾パンを食べるのか問題。フリーズドライ食品、缶詰、無洗米など、結局普段から

食べているもの。懐中電灯、ラジオもほとんど使わずに終わる

- ・ライフラインが早々に復旧し備蓄もあったが、野菜や果物の調達に自転車で走る
- ・向かいのスーパーが4/17には営業再開するも大行列
- ・学生の安否は早々に確認。LINEを駆使し教員より迅速。実家に戻る者多数
- ・近所では水前寺公園の大鳥居が倒壊し池の水が濁れた
- ・息子の誕生日をありあわせで祝った
- ・倒れて歪んだ本棚をすべて廃棄処分に出すなど、取りつかれたように片付けにあたる



水前寺公園
(現在は復旧)

4. 活動

- ・「くまもと学校支援隊」

連休明けまで市内の小中学校が休校となったことから、大学周辺の9校にボランティア学生を派遣して子どものケアにあたらせる。

巡回型の慰問案→避難している子どものケア→休校で行き場のない子の面倒と学習支援
訓示「自分の身を自分で守ること」「子どもを守ること」「創意工夫をすること」

- ・町内会の一員として

水前寺公園の池の掃除

川に流れ込んだ瓦礫の撤去

- ・日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）に合流して
益城町中央体育館での足湯
益城町安永仮設での足湯、交流カフェ、炊き出し

5. 熊本地震が問いかけるもの

- ・規模は小さいが、多様な要素が混在している
余震と本震、大量の避難者
都市型災害と地方型・農村型災害
津波災害のイメージとの相違
5か月たっても風景が変わらない
観光地の災害、観光への影響
- ・「過去の教訓」？

ブロック塀の倒壊多数

九州における水害イメージの強さ

- ・明治熊本地震（1889）

表俊一郎・久保寺章『都市直下地震－熊本地震から兵庫県南部地震まで』古今書院
初めて地震計で観測された都市直下型地震

余震の頻発と余震流言など、まるでそっくりの経過

・国立科学博物館のウェブサイトでは「明治熊本地震で被害を受けた熊本城の写真」が以前から公開されていた



仮設住宅交流会

(地域塾9月度研究会の配付資料と写真の一部を収録しました)